

第3回神奈川県立県民ホール再整備基本構想策定委員会 議事録

日時：令和7年7月7日(水) 16:00～18:00

場所：大同生命横浜ビル 13階 会議室4

1 開会

○事務局

- ・会議を公開とし、傍聴者3名が入室
- ・事務連絡

○稲村委員長

- ・委員会成立の報告

2 議題 再整備の基本方針について

- ・資料2に基づき、事務局より説明
- ・小林委員の事前聴取意見について事務局より説明

<小林委員の意見>

- ・ 「県民の文化芸術の原点」という理念案について、県民のためを強調するということは重要である。ただ「拠点」ではなく、なぜ「原点」という言葉を使うのか、「拠点」でいいのではないか。
- ・ 3つの方向性については、全体的に方向性はよいと思う。
- ・ 「多目的」という言葉よりも「多機能」とするのが現在の文化コモンズ的な考え方かと思う。今時はかつての多目的ホールというものとは性能が異なっているので、「多機能」という視点が大事である。
- ・ 自主事業と貸館事業のバランスについて、県民ホールの場合は、貸館も重要な役割を担っている。どういう使い方にせよ、県民が利用しやすい施設を目指していくのがよいと思う。
- ・ 自主事業の必要性がかつて語られたのは、施設を借りてもらうことが少なかったという地方の事情や、「やる人」だけが、文化、芸術の受容者ではないという視点を取り入れる過程だったためだと思う。

- ・ 貸館で利用率が高いことは、プラスに捉えていくことが大事。首都圏ならではの強みではないか。
- ・ より県民に文化や芸術に触れてもらうための設備を備えることが求められる。
- ・ 世界を意識していくことについて、文化、芸術の世界では当然のことである。
- ・ 日本にいる世界の人や、多様性に目を向けていくのは県の役割として重要。
- ・ さらに、これからの受容者や利用者の減少を見据えてインバウンドに対する視点もあっていいと思う。

○稲村委員長

まず、前提条件の整理について前回委員会で笹井委員からご指摘があった部分については後ほどご確認をいただきたい。

前回委員会で恵良委員から県民ホールのポジショニングや方向性について、もっと議論をした方がよいとのご意見をいただいた。それも踏まえて県民ホールの方向性についてご意見をいただきたい。

○佐藤委員

質問だが、資料 P10 に他の県有施設との比較があるが、県立美術館が含まれていないのはなぜか。今回はパフォーミングアーツと美術の融合なども議論に上がっているので、県の文化施設という意味では美術館も含めた上で、この県民ホールがどういう位置付けなのかを考えた方がよい。

○事務局

資料を修正し、県立美術館も加える。

○雲龍委員

P13 に首都圏の主なホールのリストがあるが、民間施設と公共施設が混じっている。民間と公共では使う側からすると、金額や借りられる期間などに大分違いがある。民間の施設に合わせていくのか、それともこれまでの県民ホールと同じように、自主事業も含めて行っていくのか。

○事務局

基本的には県民のための施設であるため、民間とは違う公共の役割を果たすという意味で、今までの県民ホールと近い展開を考えていきたい。

○雲龍委員

先ほど海外からの出演も視野に入れたいとの話があったが、海外から招聘して作品

を作るには時間もかかるので、民間のように使えるホールになるといいのではないかと
とも思う。

○稲村委員長

行う事業の規模感も大きく関わる場所である。ジャンルの問題や、ターゲットの
話、自主事業と貸館のバランスなどの要素も関わってくる。

○石田委員

別添 1 の資料についてはどのように捉えたらよいか。

○事務局

県民ホールは、横浜市の山下公園通り周辺地区まちづくりビジョンの対象範囲に位
置するので、基本的にはこちらと足並みを揃えて行っていくイメージを持っている。

○石田委員

この内容を十分に理解した上で議論をすると理解した。

○稲村委員長

そのほか「多目的」ではなく「多機能」という言い方がよいとの意見もあったがど
うか。

○長門委員

「原点」なのか「拠点」なのかについて、「体験の原点」というのはあるが、なぜ原
点とされたのか。

おそらく、県民ホールは体験する場でもあり、自ら活躍する場所でもあるという両
方の機能を持たせようということであると思う。語感の問題もあるが、「原点」が一つ
だけと捉えられると本来伝えたいことと違ってきてしまうかと思う。

また「多目的」よりも「多機能」という言い方が良いと思う。今は色々な表現が増
えてきているので、「何でもできる」としていくことで、新たな目的ができるかもしれ
ない。

ある時期まで「多目的」という言葉は、色々なことができるという印象で使われる
ことが多かったが、これからは違ってくると思う。

また、海外からの出演については横浜市の動向とのすり合わせなども視野に入れて
のことと思うが、出演だけではなく海外の作家の展示も入ってくるかと思う。

ただし、現在のギャラリー設備は、海外からの作品展示ができる環境を備えていな
い。美術館と同等の設備を持てば海外からの規模の大きな作品や、広いスペースを活

用した美術鑑賞や芸術活動ができると思う。今の県民ホールギャラリーのコンディションでは美術館の作品は貸し出せない。そこをクリアすることで活用の幅が広がり、場所柄集客も発信もできるようになると思う。

合わせていうと、ホールで行われる演劇や音楽が「時間の芸術」であることに対して「空間の芸術」である美術が、どのように時間と空間を提供できるかが大きなポイントになると思う。

○稲村委員長

原点の話について各委員からご意見をいただきたい。複層的な考え方も重要だと思う。佐藤委員からもホールとギャラリー融合の話があったと思うが、意識するポイントかと思う

○宮崎委員

二点意見を申し上げる。

一点目は「原点」という言葉について。おそらく、これまで県民ホールが多くの人にとって文化体験の場であり続けたという経緯と、これからもそうであってほしいという願いが込められているのだろう。そういう意味では共感できる。「原点」という言葉は回想する、振り返るという意味が強い。例えば「私にとっての原点だった」などの言い方をするので、県民ホールを利用した方が結果としてそう感じることは自然かと思うが、理念として掲げるには違和感を覚える。

また、文化芸術の原点は人によって様々ではないか。県民ホールの体験だけが特別な意味があるというニュアンスにならないように。「県民ホールの体験が特別で、それが県民全員の原点だ」となると、他を排除しているように見えかねない。表現上の整理が必要。「原点となるような体験が生まれるような環境を作っていく」、ということだと思うが、考えていかなければならない。

二点目は、「県民の」という表現について。もちろん県立の施設として重要な視点だが、あえて「県民」と言っていると何か特別な意味があるのかと聞きたくなる。また、県民以外を対象外にしている印象を与えないかという懸念がある。

文化芸術の拠点は地域に根ざしながら様々な人との出会いや交流によって価値が高くなっていく、ということならば、訪日外国人や近隣の都道府県からの来場者・参加者、あるいは国際共同制作など、多様な関係性の中でこそ施設の力が発揮される。それをあえて枠の中に押し込むことを言う必要はないのではないか。「県民のため」ということは出発点にあるが、あえて「全ての人に開かれた文化芸術の場」ということを言う方が、結果的に県民のためになるのではないか。

○稲村委員長

「原点」「県民の」ということにご指摘をいただいたので考えていきたい。最終的にどうまとめるか難しい部分だが、アイデアをいただき事務局でまとめていただく形になるかと思う。

○石田委員

資料 P10 の（５）に利用用途の比較があるが、県民ホールは全部に丸がついている。これまではそうだったが、これからこれでいくのか議論をしなければいけない。これだけのオールマイティな会場・ホールを生み出せるのであれば、スーパーホールとなる。

オーケストラ、室内楽の粒だった音が綺麗に聞こえる、あるいは大規模なライブの装置を持ってきても吊り込める、あるいはバレエの際には足の先から手の動きまで綺麗に見える。オペラを上演する場合は声が満遍なく響き、見切れが少ない。一方で現代劇では台詞が明瞭に聞こえなければならないという音響が十分に実現できるということ。加えて、歌舞伎、文楽、落語、漫才もすべて一つの館に担わせるのはすごいことだと思う。それによりある程度専門性が失われることも起きる。

このホールは何を目指すのか。たくさんの機能を持たせること、やることを実現するのか、それとも前回上野委員がおっしゃったような創る方を際立たせていくのか。

そういったことも十分に考えながら議論を進めていかねばならない。

神奈川芸術劇場 KAAT は演劇やダンスに重点をおいたホールとして機能している。神奈川県立音楽堂は素晴らしい音楽の殿堂である。他にアートホールや青少年センターもある中で、県民ホールがどこまでオールマイティであるべきかまだ自分でも結論が出ていない。

一方で、P10 の（４）2022 年度集客状況を見ると、これだけの範囲から人が集まっている。これから、もっと集まりたいと思えるような場所として、県民にとっても、周囲の人にとっても、国際的にも人が集まるようなマグネット機能を持ったホールを作ろうとする時に、オールマイティなホールがその機能を担えるのかということは議論をした方がよい。

最後に「原点」なのか「拠点」なのかだが、「拠点」としての新たなホールのあり方が望ましいのではないか。

○稲村委員長

オールマイティなのか専門性を持つのかは大きな分かれ目なので詰めていきたい。一度問題提起として受け止めながら次の議論に進んでいきたい。

次の議題に移る

・資料 3 に基づき、事務局より説明

○稲村委員長

基本方針の1～9について資料に細かく書かれているので、この内容についてご意見いただきたい。また、基本方針を意識しながら理念についても改めてご意見をいただきたい。

私から一点、前半のご意見を聞くと基本方針の一番目が、先ほど言っていた理念に近いのではないかと。「原点」や「拠点」ではないが、例えば宮崎委員の言っていたような「地域に根ざしながら交流する」というのはここに近いのではないかと。

前回の議論にあった、鑑賞のための場所にしていくのかということも大きい。20世紀型という言い方をしているのか分からないが、文化施設のパラダイムシフトがあるのであれば、鑑賞から参加のようなイメージや、コミュニケーションのためのアートということも意識しながらご意見をいただければと思う。

○佐藤委員

三点ほど意見を申し上げる。

一つ目は「多目的」と「多機能」という言葉について。P10 施設の役割分担の表で県民ホールがすべての利用用途に丸がついているのは、大ホール、小ホール、ギャラリーがあるためである。本来は大ホールはどの役割か、小ホールはどの役割か、と細分化しなければならないのではないかと。また三角の表記もあるので、もう一段精度を上げて考えた方がよいのではないかと。

言葉については「多機能」がよいのは理解するが、一方で建築的な視点で言うと「劇場」や「コンサートホール」という名称と同じくらいに「多目的ホール」という名称が浸透している。建築的な形態を表すときに使われている言葉であり、舞台袖があり、音響反射板があることで音楽に対応するといった、生音での演奏が可能な機構を持つホールを「多目的ホール」と言う。

もちろん、「多機能」という言い方をしてもよいが、ここでの議論が基本計画に移る時にニュアンスも同時に伝えていかないと、「今までと全く違う機構を持った劇場」と拡大解釈されないかと。「多機能」という言葉があるとしても、「どういうジャンルのどういうことが行われるのが大ホールで」といったことを明確にしなければ、収容人数の問題もあると思うので、建築の条件を設定する際に適切に決まらないのではないかと。

二点目に、今回は「ホールとギャラリーが融合した文化芸術の実施」というのが「4 優れた文化芸術作品の創造」の中にあるが、ホールとギャラリーを融合させるのか、舞台芸術と美術を融合させるのか。両者は似て非なる話である。ホールとギャラリーを一体にして何か使うことを指しているのか、それとも舞台芸術と美術が融合した事業などを行っていくのか、もう少し明確にした方がよいと思う。

先ほど県民ホールと県立近代美術館の話をしたが、東京都の上野で考えると、東京文化会館が多目的ホールにあたり、東京都美術館に公募展示室という市民が利用できる展示ギャラリーがある。それらが一緒になっているのが神奈川県では県民ホールであり、東京都美術館の企画展示室が独立したのが神奈川県立近代美術館と考えられる。やはり、多目的ホールと展示ギャラリーが一緒にある施設は、一般的には他の都道府県にはあまりない。そのことをプラスに考えていくのか、そうではなく県民ホールは舞台芸術に特化するのかという問題があるが、現段階では美術と舞台芸術が並行して議論が進んでいる。それならば融合という、他の都道府県にはないものを視野に入れて考えることにより、何か違う可能性があるのではないかと思う。

三点目は創造活動のこと。資料に「練習室」という言葉が出てくる。「練習室」は舞台芸術の活動を想定されていると思うが、美術を想定した「アトリエ」「アーティストインレジデンス」という言葉も出ている。そこを考えると、本当に創造活動の部屋を持つのか。加えて、舞台芸術用と美術用の創造活動の部屋を両方用意すると規模が大きくなる。今年度は基本構想だが、建築に携わる身としては、それを具体的な部屋に落としこんでいくことを考えると、どこまで風呂敷を広げるのか絞るのかを現実的に話した方がよいのではないか。

最後に、言葉の問題だが、P33の上から5つ目に「国内外の文化施設や文化団体等との人的交流による新しい技術やノウハウの継続的に吸収」とあるが、「ノウハウを継続的に吸収」か「ノウハウの継続的な吸収」ではないか。

さらに6つ目は「リアルタイム又はアーカイブの文化芸術作品の発信」とあるが「アーカイブによる文化芸術作品の発信」ではないかと思う。

○稲村委員長

佐藤委員に詳しく聞きたいが、ホールとギャラリーの融合については、施設のものと事業的なのものと、どちらをイメージされていたのか教えてほしい。

○佐藤委員

ホールとギャラリーが複合した施設は色々あるが、舞台芸術と美術が融合している事業はほぼないと思うので、今度新しくできる施設はそういったことが、ひとつの売りになるのではないか。

○吉野委員

気になったことを二点ほどお話ししたい。

一点目は先ほどの宮崎委員の発言とも重なるが、「首都圏」という欄の扱いについて、9ページを通して首都圏の欄があまり埋まっていない。

現場で働く身として、県民ホールは神奈川だけではなく、東京など広く首都圏の舞

台芸術の創り手や観客から大きな期待を背負っていることを日々感じている。その射程を表現していただきたい。

特に首都圏と繋がる部分では、「東京文化会館や新国立劇場との連携」など書いてあるが、連携してはじめて県民ホールが首都圏と接続できるというより、県民ホール単体でも首都圏の皆さんに認知されるような事業が、今までもできているし、これからもできていくだろう。射程の取り方が気になった。

二点目に、「教育」や「育成」というキーワードが多くページにあるが、その位置付け、内実についてもう少し際立たせた方がよいのではないか。「育成」や「教育」は一つには観客やアマチュア、子どもたちも含めて文化芸術の受け取り手としての県民を育てていくという意味と、プロフェッショナルな人材を育成していくことの両方がある。この表の職能の欄を見ると、アウトリーチ的な教育普及と、プロフェッショナルの育成が境目なく書かれている印象を受ける。それぞれの分野で蓄積がある中で新しい成果を見ていくことが必要だと思うので、そこは明確に切り分けていくのかと思う。特にプロフェッショナルの育成に関しては企画や制作とも違う職能があるので、より専門性の高い事業として位置付けるべきではないか。

○石田委員

この9枚の資料に皆さんの意見を落とし込んでいくことを通じて、先ほど佐藤委員がおっしゃったように、具体的な計画に進む際の拠り所となる資料にするための議論が求められていると思う。

私も、国内や海外、首都圏あたりをもっと見て、議論を深めていく必要があるのではないかと考えている。我々はどうしても舞台そのものに目がいってしまう。ただし、クリエイションをする場である劇場であればそれだけでは不十分。舞台を上演するまでのリハーサル部屋、例えば音楽稽古をする場などリハーサルをする部屋が非常に重要になってくる。それをしっかりと持っていることが、首都圏や国内、海外に打って出るときのひとつの手がかり、足がかりになると思う。部屋がいくつかあることが、使ってもらえる場、借りたい場になるひとつの要素になることは間違いない。それがこの規模で、この場所で実現すれば、非常に魅力的な劇場になる。高いスペックの機械や機材が入っていることよりも、劇場としての使いやすさ、使いたさを強調していくことが重要なのではないか。

二点目は、小屋としてのサステナビリティ。全国の施設が再整備やリノベーションをしている中で、令和の我々はサステナビリティについて考えねばならない。それに関しては9番目に「持続可能な維持管理及び運営」とあり、基本的には建物や環境、お金の面ということが書かれている。

ここでひとつ、非常に重要なことを書いてほしい。それは他のページに書いてある「人」についてである。ここで働いている人が働き続けたいと思うような、「人」の面

でのサステナビリティが9番目に抜けている。1番目には「障がいがある人が働ける環境の構築」と書いてあるが、それは9番目に入るのではないかと感じた。9番目に「人」の視点を入れていただきたい。

加えて、1番目から順番に意見を申し上げる。

1番目の障がいのある職員の話は、今申し上げたように9番目に入れてよいかもしれない。サステナブルな職場環境と、それを支える人たち、あるいは担う人たちの視点を加える。

2番目は「手と手を携える」ということは将来的にあってもよい視点だが、使いたい、借りたいと思える場になってもらうことが重要な視点だと思う。一番下の施設・整備の中にある、楽屋や搬入口などをどのように作っていくかは非常に重要。また、リハーサル室は3つ以上必要と書いてあるが、3つで足りるのか。それもぜひお話をしたい。

3番目「国内、海外、首都圏」の欄にもっと書き込みたいが、県民の作ったものをここに書けるとよいと思う。

5番目は言葉が気になる。「国内外の文化芸術施設との、従業員の交換制度」とあるが、「従業員」という言葉は使いたくない。交換制度は交流ということだろう。以前、芸団協（公益社団法人日本芸能実演家団体協議会）などが国の施策のひとつとして、施設同士の職員交換・交流を行っていた。もし本当に取り組むならば、その時の課題なども理解した上で取り組まなければならない。

6番目は「ライブラリアンによる検索データベース」とあるが、資料室を作ろうということか。そうならば専門的な人材が必要だし、クリエイションとは別機能になる。ライブラリーをきちんと作るまでいくのか、あるいは上演したものが情報として蓄積されていく形であれば、ライブラリアンやアーキビストなど、そこまですごい機能を劇場に配置する必要はないので議論の余地がある。アーカイブ機能、映像だけでなく、そこでやったプログラムや舞台の美術などの蓄積機能はあってもよいが、どの程度かということは議論が分かれると思う。

7番目の「安定した労働環境の整備」は、9番にも関連する話であると思う。サステナビリティを考えなくてはいけないということが重要なポイントだと思う。

○笹井委員

石田委員のお話は、私もまさしく思っていた。劇場そのものがサステナブルであることを考える中で、県民ホールは、文化芸術が好きな人たちだけが来る場所ではなく、県民や、それよりも広域の方がいらっしゃるような場所として、社会問題とどう向き合うか、社会の課題解決に役割を果たす存在であってほしいと思っている。

例えば、色々な社会課題があるが、いわゆる「誰一人取り残さないためにどうあるべきか」の観点から、分断や孤立などで苦しんでいる方に対して社会の中で居場所を

作ったり、クリエイティブな人だけでなく、文化芸術に詳しくない人でも何となく集まれる居場所を作ることなどがある。そのあたりの視点をどこかに入れ込むと、これからの時代に求められる県民ホールの役割をひとつ果たせるのではと思う。

また、第2回委員会にて示されたライブエンタテインメントの資料を修正していただいた。ライブエンタテインメント市場全体は伸びているとはいえ、引っ張っているのは人気のコンテンツや大規模なアリーナで行われる催し、ジャンルで言えばポップスである。ある意味二極化が進んでおり、マーケットが伸びているからといって全てのジャンルが伸びているわけではないのは、注意事項として必要かと思う。

市場の動向で売れるものだけを行えばよいということではなく、公共の視点からすると次の文化芸術を鑑賞する人をどう育てるのかという視点も必要だと思う。示された資料の1番に近いことかもしれない。

民間企業の立場から基本方針全般をみると、これを全て実現できるホールができたらし素晴らしいと思うが、実際運営するのは誰かを考えた際にどうか。今後整備手法についてPFIや民間企業との連携などの検討を行うと思うが、手をあげる民間事業者は見つかるだろうか心配になる。

だから駄目というわけではないが、ゆくゆくは整備手法や運営をどうするかなどの話に辿り着くので、全部やれると素晴らしいとは思いますが、これだけは重点を置いて絶対やるといった絞り込みが議論の中で出てくるといいと思う。

○宮崎委員

言葉のことだが3番、P36の職能に突然「優れた施設利用担当」とあるが、そうは思うが言葉としてはどうか。

一点目、先ほど「ライブラリアン」という言葉が出てきたが、音楽の分野だとオーケストラのライブラリアンのイメージがある。ライブラリアンと書かないで専門家や、司書やあるいはアーキビストなど色々な職能があるので、今後考えていったらよいと思う。

サステナビリティについて人材についてのご意見があった。まさに毎日人に苦労している身からすると同感だが、これまでの経験からなるべく少人数で効率的に管理できる施設設計にしていきたい。人を減らしたいということではなく、それによって生み出される人的リソースを他のことに活用していきたい。例えば、ここここの受付は両方に人を配置しないと成り立たないなど制限の多いホールがある。

先ほど県民ホールのポジションの中で貸館と主催事業のことがあった。県民ホールは文化芸術ホールではあるが、集会や大会などにもホールが利用されている。集会や大会などを行っているから文化芸術で利用したい人が借りられない状況が生まれていたのか。また、ホールの稼働率は高いが、集会や大会が入っていたから稼働率が高かったのかなど、実際どうだったのか、そして、それを踏まえてどうしていきたいのか

は興味がある。

同様に自主事業と貸館事業のバランスも、文化政策的な判断と施設経営的な現実的な視点と両方を考える必要がある。

二点目、次回以降は施設の話になるのでそこにも繋がるが、大ホールの客席規模は今後も継続していくイメージであるが、人数だけでなく「舞台面の広さがどれだけあるから評価されているのか」などが施設検討の中で出てくる。

また小ホールについては横浜市内に代替可能な施設があるを書いてある。確かに席数だけを見ればそうだが、県民ホールとして行うべき事業としては、小ホール規模のホールも必要かもしれない。

また、ギャラリーとの連動や複合的な使い方の中で、小ホールは代替可能性があると考え、新しい県民ホールのひとつの特徴を作るというか、これまでの県民ホールとは違う、新しい何かに繋げていくキーポイントになるのではないかと思った。

三点目、県民ホールにもリハーサル室があり利用されていたが、会議室以外に何かを生み出すための柔らかい空間、用途が限られている場所ではなく、また貸室の対象でもなく、創造的な活動や多様な活動を支えるために運営者が機動的にかつ柔軟に使える場所があると、将来的なことも考えて施設を面白くしていく要素になるのではないか。もし設計プロポーザルを実施するならば、そういったものを提案してもらうのもありだと思う。

最後に、次回は敷地や予算など現実的な制約が視野に入った検討になるので、事務局にて「このくらいの構成でどうか」という設計の叩き台を出してもらえると、それを元に議論ができるのではないかと思う。

○稲村委員長

何かを生み出す場所はすごく重要だと思う。私は稽古場の運営をしているが、皆さんの声を聞いていると、専門的な場所が不足していると感じる。利用者は専門的な施設がなければ公民館などを借りることになるが、そこにはダンスマットがないなどの問題があったりする。これは課題のひとつであり、そういった機能が持てるとよいと思う。

理念的なものも含めた大きな話や、ほかのご意見などをお伺いしたい。

○雲龍委員

県民ホールである以上、理念として「県民の文化芸術の原点もしくは拠点」というのは非常によいと思う。その上で、ここに記載されていることが全て実現できるのかという点から言うと、「情報の蓄積機能」は民間でも公的な部分でもジャンルごとに在るので不要なのではないか。

また、リハーサル室や練習スペースがたくさんあった方がよいのはそのとおりで、

本番に紐づくリハーサル室などはあってもよいと思うが、恒常的に場所を借りて練習する場であれば、利便性の良いこの場所に在る必要はないのではないか。別の場所で長い期間借りられる場所を設けそこで練習し、県民ホールでは本番に紐づくリハーサル室を使う、などができるとよいと思う。

○金田委員

一番の「あらゆる人々が集まり交流する文化芸術の広場」についてだが、先日県民ホールに行った際に、建物自体に入りづらい印象があった。また前回の委員会の後に視察に行かせていただいたが、雨が降っていたのもあったが、陰気な印象を受けた。休館した後ということもあり、リハーサル室や楽屋なども暗い印象であった。「誰でも入りやすい」とは言えない印象を受けたので、本当に誰でも入りやすいような空間が作れるとよいと思う。

○泉委員

まず、こんなに色々なことができる場所にせずに、もう少し絞ってもよいのではないか。

リハーサル室については、他の場所で練習をして本番前にだけホールのリハーサル室を使うといった団体ばかりではないので、貸室としてリハーサル室はたくさんあるとよいと思う。

また、私も前回県民ホールを見学させていただいた。一度公演もしているが、障がい者としては本当に使いにくい。階段が多く、昇降機もついているが非常に時間がかかる。楽屋には表から回らないといけない、リハーサル室も階段を上がらねばならないといった状態だった。全体的にフラットに、またトイレをもっと作っていただきたいと感じた。

○長門委員

先ほど「ホールとギャラリーの融合」の話があったが、ホールは目的を持って訪れ、そのために時間を過ごすところなので、ホールだけだと建物の中で自由に出入りできるのは飲食と休憩だけになってしまう。そこであらゆる人が交流できる場として、ギャラリー機能が考えられる。美術作品を観たり発表できる場があれば、人が集まるためのひとつの方法になる。以前もそういう意味で申し上げた。

もちろん美術と舞台や音楽との創造的な作品が出てくることもあるし、それができる場所も必要だが、ホールだけだと目的が無いと入りにくい。あらゆる人が交流できるような機能として総合的な意味での美術、芸術があるとよいと思う。

○稲村委員長

私もそういったイメージもあると思っている。私はスパイラルにいたことがあり、スパイラルは交流スペースとギャラリーが一緒になっていた場所だった。そういったこともあり得ると思う。

泉委員から絞った方がよいのご意見があったが、それも大事だと思う。理念をどのようにするかを考えると頭が固くなるかもしれないが、こんな方向性がよいといった意見を出すのはどうか。例えばハーサル室についてなら、私はアートセンター的な創造的な場所として、稽古場としても常に行くような場所になってほしいといった意見など。そろそろ、どう絞るかの方向性、イメージをつけたほうがよいと思う。私はこのようなイメージを持っているという意見や将来性についての意見をいくつかいただきたい。

○佐藤委員

どこまでの機能が専有の場になる必要があり、どこからが機能を共有できたり、時間で使い方が変わったりなど開かれた、広場と一体化できる共有の場となるのかを考えることで、限られた面積の中でこういった様々な機能を入れられる可能性が広がると思う。

今の県民ホールを想定すると、大ホールはある程度閉じる必要があるが、小ホールやギャラリーは開閉することで広場と一体にできる可能性があるのか。練習室のいくつかについては広場に開かれた場として作るのか。繋がることで拡大するなど、色々と方法はあるので考えていく必要がある。

○稲村委員長

その他にも、理念を語る上で重要なサステナビリティや居場所の話もこれまで出てきているので、キーワードやご意見があればいただきたい。

○雲龍委員

P9の県民ホールのポジションを改めて見ると、大ホールとギャラリーはポジションがしっかりとあって唯一の施設であるということだと思うが、小ホールをどう活かしていくか。パイプオルガンを活かした公演が行われていたのが小ホールのポジションであったと考えると、パイプオルガンをこれからも活かすのか。また大ホールが民間のクラシック系で使われているのであれば、大ホールをプロ仕様にして小ホールを県民が使いやすいような形にすることも考えられるのではないかと。例えばキャパシティが400席で足りないのであればもう少し大きくし、県民が優先で使える小ホールがあり、大ホールはキャパシティにあったものに優先して使ってもらうなど、明確に分ける方法が考えられる。

ギャラリーはふらっときた人が楽しんでもらえる、入口の敷居を低くすることで楽

しんでいただける、入りやすい場になるとよいと思う。

○稲村委員長

次回以降に具体的な施設の話をするとう議論が深まるかと思う。

○宮崎委員

施設にも繋がる話として、県民ホールの再整備であれば、今の県民ホールで評価されていることや価値があることを継続する。県民ホール設置当時から環境が変わったことや、今の時代ならば新設しなければならない部分は新設する。ほかに代替の場があったり、使われていなかったものは優先順位を落とす。また、催しがあるときだけでなく色々なときに行って楽しい交流ができる機能を追加する。今の県民ホールで物理的に不便だったところを解消する。そしてホールのサステナビリティが重要で、そのことが神奈川県文化振興のサステナビリティにも関わることとして評価する。という程度ではどうか。何の事業を行うのかというのではない視点の方針を皆が持っているとう次回以降の議論がやりやすいのではないかと思った。

○稲村委員長

これまで県民が行い評価されてきた事業は基本路線として継続していくということで、皆さんのイメージはよいか。委員の同意を得たものとして今後の議論を進めるということでよいか。

(異議なし)

それでも新しく必要な機能を入れたり、サステナビリティを考えていくと理念的な説明も変わり、新しい施設になっていくと思う。

本日は多くのご意見をいただいた。理念に関しては、まだ意見が整理しきれていないところがあるが、「県民の原点」についても議論があったので、事務局には委員会での意見を反映しながら整理していただきたいと思う。

また、今後は、どこに優位性を持たせるのか議論をする際に具体的な施設の話やリアルな話が出てくると思うので、それを考慮してまとめをお願いしたい。

ホールとギャラリーの融合も県民ホールの特徴だと思うので、施設的な面や事業的な面も両方意識していかなければならない。

県民ホールがどれだけオールマイティであるべきかについても議論を深める必要がある。施設計画に落とす際にどれだけのことができるのか、継続して議論の対象にさせていただきたい。

リハーサル室などをどういう方向性にもっていくのか。創造的な部分を強くしていくことも考えられるし、居場所を作る広場的な機能もご意見が出ている。具体的な職能の話も施設を具体的にしていくときに必要となる。

次回は県民ホールの規模感や職員、どうやって運営していくかも含め、委員から意見を聞くための資料を作っていただければと思う。

また、本日は「サステナビリティ」という言葉が多く出てきたので、反映していただければと思う。

今回で3回目の委員会が終わり、委員の認識が概ね一緒と感じる部分と、多面的な意見がある部分が見えてきた。次回以降も継続して議論を行っていきたい。

ここで説明しきれっていない部分は、議事録などで随時把握してもらえたらと思う。以上を本日の委員会の意見として提出したい。

3 閉会

○稲村委員長

以上で本日の議論を終了する。次の委員会は、本日と同じ会場で8月6日15時から17時を予定しており、施設整備について議論をする予定となる。次回も原則どおり委員会を公開としたいと思うが、よろしいか。

○委員

異議なし

○稲村委員長

それでは、これをもちまして本日の委員会を終了する。